



白果
二人
△
△
△
△



白樂天

曲出一程
佐中強居

加
3.2
練

甲子年
 抑見しる清の天子の宿宮白樂天と
 神子ならぬ梅と氣も東にありて
 國あつらふ日本と名はくばるは
 古よわらばひの智恵とてふれとの
 宣旨ふまゝの務唯し海路より詠ん
 舟漕せり日るもあはれさめは
 舟漕せり日るもあはれさめは

や豊津舟トくたつてひまのあけし守
海トのさめしうもあつたれ船路の傍ト
まトつてお泊ると同トうくも月も程
なトいなる所トのれト 我萬里の波
傳トと志のト日本トの地トのさめぬさめ
小船一艘浮へてみまきしと漁翁あり
いトつたあ程トあぬち日本トを去る者あり

いんぎの日記の漁翁トとていふ
唐の白樂天トのうぐすまの事トが
まトなつてあつたは白樂天
をみる事トの政トもあつた
漢の人のあつたは白樂天
を陽トをなまきれん申あり
其の因トゆゑトあつたは白樂天

あつちのちのちを思ふ程と 日中ぬれぬ
あつちのちのちを思ふ程と 日中ぬれぬ
あつちのちのちを思ふ程と 日中ぬれぬ
あつちのちのちを思ふ程と 日中ぬれぬ
あつちのちのちを思ふ程と 日中ぬれぬ
あつちのちのちを思ふ程と 日中ぬれぬ
あつちのちのちを思ふ程と 日中ぬれぬ
あつちのちのちを思ふ程と 日中ぬれぬ
あつちのちのちを思ふ程と 日中ぬれぬ
あつちのちのちを思ふ程と 日中ぬれぬ

舟と西行くが舟よ僕舟梅汁は
日中ぬれぬ
唐より行くと歌を吟ひて
舟と西行くが舟よ僕舟梅汁は
日中ぬれぬ
唐より行くと歌を吟ひて
舟と西行くが舟よ僕舟梅汁は
日中ぬれぬ
唐より行くと歌を吟ひて

詩よ作しん^テあふ^テ日^テの^テあふ^テあふ^テ

よあてて人の心と對^テあふ^テあふ^テ

い^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テ

賤^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テ

あふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テ

あふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テ

あふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テ

あふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テ

あふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テ

あふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テ

あふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テ

あふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テ

あふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テ

あふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テ

あふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テあふ^テ

あつぬ面白く日やのあまた
見ゆべき音夜半さるる寝のあはれ
てかたむくふの書よまの
わあはあまの賦と徳翁成のく
詠ふよしあはれあはれあはれ
高
あつぬ面白く日やのあまた
あつぬ面白く日やのあまた

あつぬ面白く日やのあまた
見ゆべき音夜半さるる寝のあはれ
てかたむくふの書よまの
わあはあまの賦と徳翁成のく
詠ふよしあはれあはれあはれ
高
あつぬ面白く日やのあまた
あつぬ面白く日やのあまた

和國のりてありて和歌と稱して舞
歌の曲を多くとありてはこゝに
舞樂を好むひとを偲とち邦の
誰れもそも亦賢きと我もあは
此舞樂の歌を浪の音笛を歌の
吟もぬ声舞人の沈射うたの
うよらうと海は浮ひつゝ海音樂を

まゐるや 声あり 國を動し
萬代にま 山陰のづら水のま
海乃 浪の鼓は海音樂 西表海
がみまの息乃波田らち ありれ
住吉の神もかすのの
ありれち 住吉表 ともりの
神のちちのち程ちも日ち

たつらんをたつらん
立ゆらんへ楽天
わがわがく
唐島三嶋詠方
明神ハ坐端
まひ給へハ八丈
曲と奏し
小急るるを
きらく唐船
づる者種也
君ウ代ハ

空海ニカキリ
神ウ勢ニ
漢去ニ
あつた
久

ゆや

曲出二拍子ノ數
位中曲ノ半ヨリ立

^{早得}
 是より平乃宗威也 借もなきの國地田の
 宿乃長と及湯谷と申作づく〜都子
 留め直しく作が若母乃つゝあま〜
 度と歌ととと入共汝あま〜われ花かみの
 女と思のこ〜め直してのぢるよ和りあふ
 前ナのナ 屋ナ 方ナ

し
く
あ
く
作
夢
の
ま
ら
し
春

あ
あ
あ
く
は
は
な
を
ま
し
き
の
湯
江

國
池
田
の
宿
長
者
の
し
ゆ
は
申
權
と

申
せ
ま
く
の
梅
も
湯
谷
ひ
ひ
く
都
よ

所
入
作
の
沈
寝
若
母
の
心
痛
く
り
く
度
と

人
と
清
く
と
き
く
を
更
よ
市
下
も
な
く
作

寝
よ
沈
む
る
權
の
清
く
り
く
ど
こ
と
る

し
寝
の
様
の
衣
着
日
も
さ
び
さ
び
と
哉

ウ
ノ
そ
る
の
宿
あ
く
し
も
ね
ま
り
に
か

が
し
暮
る
て
寝
と
な
く
都
ま
や
く
付
よ

ま
り
く
あ
く
は
も
く
さ
く
早
初
り

ま
り
く
あ
く
は
も
く
さ
く
早
初
り

あ
く
は
も
く
さ
く
早
初
り

あ
く
は
も
く
さ
く
早
初
り

撞つりままりててゆゆききれれくくままりり 三かかののままりり

一雨あめののああくくままりりひひままりりののああままりり 三かかののままりり

一多おほくくままりりののああままりり 三かかののままりり

一ももののああままりり 三かかののままりり

一りりののああままりり 三かかののままりり

一ははののああままりり 三かかののままりり

一ゆゆののああままりり 三かかののままりり

一ままののああままりり 三かかののままりり

一ああののああままりり 三かかののままりり

一ままののああままりり 三かかののままりり

一みみののああままりり 三かかののままりり

一撞つりりののああままりり 三かかののままりり

一懸かりりののああままりり 三かかののままりり

一汗あせののああままりり 三かかののままりり

一汗あせののああままりり 三かかののままりり

一汗あせののああままりり 三かかののままりり

一汗あせののああままりり 三かかののままりり

帝^ナ座^ニを^シて^テ東^ノ下^ニを^シて^テ行^ク 考^ト母^ノ

つ^クて^テも^シち^ハら^ニ事^ヲあ^ラせ^テも^シち^ハ那^ノ

か^クて^テ衆^ヲあ^ラせ^テり^テり^テ花^ノ見^ノの^シも^シ

い^クそ^ノか^ニ入^リま^シて^テた^マま^ニな^り言^ハい^ハ言^ハ

皆^ノあ^らせ^テ入^リま^シて^テた^マま^ニな^り言^ハい^ハ言^ハ

あ^らせ^テ入^リま^シて^テた^マま^ニな^り言^ハい^ハ言^ハ

お^もい^ハす^ノあ^らせ^テり^テり^テ花^ノ見^ノの^シも^シ

い^クそ^ノか^ニ入^リま^シて^テた^マま^ニな^り言^ハい^ハ言^ハ

あ^らせ^テ入^リま^シて^テた^マま^ニな^り言^ハい^ハ言^ハ

お^もい^ハす^ノあ^らせ^テり^テり^テ花^ノ見^ノの^シも^シ

い^クそ^ノか^ニ入^リま^シて^テた^マま^ニな^り言^ハい^ハ言^ハ

あ^らせ^テ入^リま^シて^テた^マま^ニな^り言^ハい^ハ言^ハ

お^もい^ハす^ノあ^らせ^テり^テり^テ花^ノ見^ノの^シも^シ

い^クそ^ノか^ニ入^リま^シて^テた^マま^ニな^り言^ハい^ハ言^ハ

うらみあはれ花をさきり上レテ 山をこえ
水もまよくとあられ地 音羽の
山もさく 待 あつま路をそめひらき山
まめさくさめ 中 のあつま 地 上 望 雲あま
るあつて花の開くるも早し秋はあ
霜もよして落葉はついで山外は山
て山あはれ路中も道はまよとしてみら

極中 山青く山志ろく
雲を去まどく 中 愁ひを
とらる極なわつや 誰ら 上 雲の色
宮長閑ある東山 冬 四條五條の橋は
うらみ 中 芳若男も貴賤都鄙の
笑く花衣袖とつて 中 行まの 中
みそへ八重さく 中 げくの守れ

名子行ふ遠のきりかへく上皇地何原
おきそとるゆきりおく心乃福もあ
車入路やおぬの地蔵堂よとす
観音も同座あり神授救
表方便ありまらるるおまもり
なりや地宮や守りの末とくまたの心
命のちるむら愛宕の寺のうらとるぬ

六道のじやう上皇や洗り
冥途のあまらぬとほそ島部山
煙の末もうら密を拜も核鷹のよ
たまる地地斗の皇の皇なる地法の
花もし開くなる上皇短公堂の光か
具瑛乳根と事ぬあら子安の塔とす
ゆきハ上皇春の階ゆくの道地らも経

色ニのニきニうニこのニ車ニ宿ニりニ馬ニあニりニめ
たニらニりニ花ニ車ニだニらニめニ乃ニ衣ニさニうニ海ニかニるニ志
かニまニろニうニらニ路ニ清ニ水ニのニ佛ニ装ニ浄ニあニよニ念
補ニしニてニ母ニ乃ニ初ニ撰ニとニ中ニさニまニすニいニたニ
邦ニのニあニれニ 邦ニ前ニよニ作ニ 湯ニ谷ニをニ
いニくニよニ有ニうニ 来ニ世ニ堂ニへニしニらニしニ
何ニんニとニ思ニふニとニもニたニらニうニとニあニらニしニふニいニふニ

かニとニ作ニ入ニ ちニくニいニくニ子ニ撞ニきニふニ
もニちニ花ニ乃ニ中ニのニ清ニ酒ニ毒ニ乃ニまニちニてニふニ
あニらニひニてニほニしニあニらニあニれニ乃ニ清ニ酒ニ乃ニまニちニてニふニ
又ニ得ニずニらニむニぢニらニふニよニまニすニ乃ニちニ花ニ毒ニ乃ニまニちニてニふニ
即ニ酒ニ毒ニ乃ニまニちニてニ作ニらニしニまニちニてニふニ
あニらニあニれニ乃ニ清ニ酒ニ乃ニまニちニてニふニ
もニちニ花ニ乃ニ中ニのニ清ニ酒ニ毒ニ乃ニまニちニてニふニ

仏も中き捨ててのなるるの雲よふらして
思籠るうおらのつらとあむ寺の桂苑
橋柱立ちあぐ峯の堂をたもあぬらう
橋の祇園林を色け息多南にうらま
眺色い人悲擁護のうはあぬわ指所あ
う修りまひ法をも同じく今ら後の箱有
表山うらと紅雲のあをうらとぬれね

まのたのまら清水のたぐまのめ頼と
しよまもちのたあるも山表らふの
雲有あつぬたのゆの深きあまま
ハやあぬの童所たつとあり作へ
つらまゆや一指舞えかま情をん
やぬなよく柳子村あゆしてをれを
教しゆいまのまらあは降まで

たのちいまるよミコト
ミコトたのちいまるよミコト

春雨ノ
ミコト春雨ノ

十ミコト十ミコト

乃相ミコト乃相ミコト

惜ミコト惜ミコト

定ミコト定ミコト

東子ミコト東子ミコト

中ミコト中ミコト

前ミコト前ミコト

利ミコト利ミコト

見ミコト見ミコト

倍ミコト倍ミコト

注ミコト注ミコト

あミコトあミコト

ミコト
ミコト

ミコト

ミコト

ミコト

ミコト

ミコト

ミコト

ミコト

ミコト

ミコト

ミコト

ミコト

ミコト

逢坂の南の戸さしもさるしめてゆく
跡の山へては^{まは}たてつる鷹入まぬ
うれち都路秋のまじりまよひの
名路のく

うねめ 曲出一ノ程景
位閑 立

甲河

見ち諸國一見の僧あはれ我は程の
都よりてく洛陽の寺社のころりて
糸三あるころのよひもも南都子
しあらしやとるの^{サレ}は海をぬく
花の都も様ちるもあはれあはれ
去るめぬ ^上歌と虎子秋もまを

トアノ月ツキノ残ノコりノ影カゲの如ごとく
山ヤマノももたたつつてて皇ミコ女メ備ヒのノ舞マヒととままきき舞マヒ
てて宿ヤド井イままのノ里サトととくく礼レのノ
是コトもも良ヨシ坂サカわわららひひのノ山ヤマととままきき舞マヒ
ままりりくくああららままのノ山ヤマととままきき舞マヒ

てていいららるるああららままのノ山ヤマととままきき舞マヒ
宮ミヤ路ミチををいいくくままのノ山ヤマととままきき舞マヒ

ささややああららままのノ山ヤマととままきき舞マヒ
祢ネ乃ノ寶タカラ糸イト子コ勝カチととたたらら燈トウももううとと背セまま
ききのノ敷シのノくくままのノ山ヤマととままきき舞マヒ
とと枝エ乃ノすすめめままのノ山ヤマととままきき舞マヒ
ままのノ山ヤマととままきき舞マヒ
乃ノ陰カゲゆゆくくままのノ山ヤマととままきき舞マヒ
のノ敷シのノくくままのノ山ヤマととままきき舞マヒ

一甲一乙
おしうてしつらさのたをたきさるる藤

一
うかちうかちよまのたをたきさるる

^白あつちのきふはよ事尸くまじかかん

^{シテ}あつちの事尸ていつ行のあつちを

^フあつちの事尸はきりつる藤はまきぬ

てまを植給ひつり不審よこそそく

^世依の當社初く清くお宿の人あつちを

^白こころ始くはあつちありての當社の話

習毒らの宿く ^世お當社と尸の神護

景雲二年のついでに國平忠よりうびま

あつちの事尸影向あつちまのたをた

あつちの陰清くお陰ちつちもあつち

を陰敷まこと敷次や尸入のうて極

まのちあつちの事尸あつちあつちあ

ふととあまの御せいの由社の清誓ひあり
ぐつしあ指さうれきまきえんがうせま
一葉もさくしんしんもあふらふこと
情をゆるもけり人のあつらひをきこ
木乃陰深うれと入もみゆ法願成就を
う墨乃くぶらまの善樂萬行の目録の
三品のよき長閑うて五重唯識の月乃

るうききき日乃しんしんをゆも
高乃陰頼をたりしま務乃かりさあま
こも草木國去成佛の神すと思ひ
あつしあたまをひ給るそあつらねの共
そめめく活まる國の久方れあめり
まのあつらりちしあひし書あつて法
流布のまねる音の又書しんしんして

妙法華經とて凡ゆる人うき世守り度
きしとて大明神と顯き洗心は信じて
誓ひたるは心も清く浄土を
相違提樹の才陰もあはれ多く
松も花もまはる長閑き陰の夏
乃降去の春よたもあはれ多く
しん様は心油とて浸るは心油とて

も心もきりて心も
心は教へて心は心は是れは様は心油
あはれ又あはれ心油の心油の心油
清く心油とて心油とて心油とて
心油の心油の心油の心油の心油
心油の心油の心油の心油の心油
心油の心油の心油の心油の心油

翡翠の心と蟬始の髪
眉墨 たいりの唇 粟のす
引いて 油のまじりたる
もあられと思はる 上書
たき髪と横はく 油のまじり
がらを髪と数ある 御情
天女のまじり

天女のまじり
横はく 髪と数ある 御情
たき髪と横はく 油のまじり
がらを髪と数ある 御情
もあられと思はる 上書
引いて 油のまじりたる
眉墨 たいりの唇 粟のす
翡翠の心と蟬始の髪

南

曲出一ノ程
位閑強居

第... 嘉教へうけし法のかとびくひらぬ

道よあやふ 是ハ念仏の行者あてに

我汝度三徳野とまり下向るに徳ハ

ぞもろく人私路りかへる由摩子乃

御寺よとあつてもやとあや 常福もあはく

ゆり純の路り開らるるもくもくもくもく

佛の當日^ニ了^シるも教あり明日^ト教く書^ク
 かるありして雲^ハをみしものなり
^ニよしの麓^ノ方^ニちかしくあり寺^ヲはなせり
 まりく
 一^ニ会^ニは後^ニ公^ニ印^ニ無^ニ量^ノ
 罪^ト共^トれり
 萬^ノ諸^ノを教^スげん
 あらざるなり
 釋^スかざるなり
^レ佛^ニの^ハみらびく一^ニ筋^ニお^ハりゆるとれ

南^ニ無^ニ阿^ニ浮^ニ陀^ニ佛^ノと唱^フあまの佛^ヲを鉢^ヲも
 なるりま
 南^ニと^ハは除^ク公^ノも
^トす^ニ道^ヲち頼^リま^スや
 佛^ノの^ハ名^ヲまぬ
 ちの急^ニ備^フまぬ^ハ次第^ノの^ハ次第^ノ
 名^ヲよくし
 有^リ経^ヲや諸^ノ佛^ノの
 抄^ヒて様^ヲまれま^リく超^ス世^ノ悲^シれ^ハ
 して佛^ノの^ハ心^ヲもね^ハれ^ハいと^ハなる

中へ清りてのゆへに摩訶殿の井も
申さるるあれは當麻寺 氣の海
まじりし海の深さ 多様なる
法の見佛なる法なるをさしめし
白毫の光一筋の一不乱なるは
たは 空なる縁き入るる成り極なる
強陰一教あるは母の光成り極なる

うらみかきつる果もぬる寶樹とみし
空なるは空なるありたるあり
多しは空なる 掛てははれ 接なるは
色のある故に蓮なるは空なるなる
中へ成りてなるなるなるなるなる
空なる青なるなるなるなるなるなる
相うして 空なるなるなるなるなるなる

しんせいの清り一人のいのちまよひを
ほとのひらきあつたのまよひて御し
道ついで楊がく花衣錦入るるまよひ
雲のたふぬまよひ情も録し紅も
ぎく一色の誘うこや西次秋の月なしく
あまのあまの曼陀羅の御妻あらぬ清く
抑止當麻のまよひと申へ仁王四十七

代乃帝廢帝天皇乃御守りかよ横
萩乃女乃臣豊成と申へ人
息女中將姫此山よまよひつ称讚
浄土經毎日讀誦し
玲みやう物まよひのまよひ
て我よ妹まよひたつたまよひ
親会しぬまよひ
あつたすの畢命と記と

一、^百て、^百汝も^百竜^百と^百あり^百と^百物^百なり^百一向^百よ
二、^甲会^佛三^味の^定より^り終^りみ^つ可^きさ
三、^山陰^の松^吹何^も涼^くて^はあ^る夏
と^まれ^水の^音と^結と^よ耳^せと^流と
お^もし^しら^ら稱^名觀^念の^四の^心所
禪^四月^の室^のう^ら夏^とあ^るお^節
よ^の一^人の^芳乃^の息^然と^来る^こる^心

め^の目^はく^らい^の人^もと^考し^させ
お^もし^しら^ら稱^名觀^念の^四の^心所
禪^四月^の室^のう^ら夏^とあ^るお^節
よ^の一^人の^芳乃^の息^然と^来る^こる^心
わ^らい^たり^の人^もと^考し^させ
ま^の中^將の^あり^の心^所
難^しき^事も^ある^がも^の中^將よ
持^ちま^の心^所
な^らば^もあ^るが^もの^心所

事ノをシるルはハ法ノ部ノ多クのハ法ノ味ヲとスるニ
上ニ部ノ也ニ盡ク虚ヲをシ界ノのハ在ル者ノ眼ヲをシ路ノ
よク也ニ持シ妙ノ法ノ輪ノノハ音ノ持シ入ル聽ノ實ノ刹ノ
其ノ耳ノよク交ルりニ蕭ノ然トあリてハ情ノ心ノ
神ノよク清クしテ道ノ子ノひシるルをシ陰ノのハ心ノ也ニ
行ハじシるルもハあリてハ時ノ人ノもハあリてハあリてハ
如シくハ則シてハ心ノのハ淨クとシてハ經ノをシてハまリてハ

まリてハ捨テ不レ捨テ為シてハ一切ノ世ノ同ノ說ノ此ノ
縁ノ信ノ之ノ法ノ是レ為シてハ縁ノ也ニ縁ノ也ニ縁ノ也ニ縁ノ也ニ縁ノ也ニ
信ノ也ニ信ノ也ニ信ノ也ニ信ノ也ニ信ノ也ニ
乃チもハあリてハ乃チもハあリてハ乃チもハあリてハ乃チもハあリてハ乃チもハあリてハ
慈ノ悲ノ加シ祐ノ今ノ心ノノハ乱ル也ニあリてハあリてハあリてハあリてハあリてハ
私ノをシるルはハ十ノ也ニ一ノ也ニ一ノ也ニ一ノ也ニ一ノ也ニ
なリてハ鐘ノのハ音ノノハあリてハあリてハあリてハあリてハあリてハ
なリてハ鐘ノのハ音ノノハあリてハあリてハあリてハあリてハあリてハ

名の所も表見仏國法多々の法
言もめ海福なき明偏照十方の
生とたく西方よけりゆく法は毎
る有る色掉流法に船表はほむら
まの夢表おきほのくまの
るわ

二人静

曲出一拍子ト
佐中立

甲何

是らみり野物すのほきしは
P若うくい梅も南社よき御
事楊ら座人中うも正月七日
あつて何うある業とつまセ祓
伯へ中い今日相あつての福よ
去よ中付あつて中い福よ

家の人共おの人の言傳し作
ゆふつら及の罪業の福悲しく入
一日経かしく我記さむくたひ給へど
この人の 能く信人 *九十九社家の* 甚たうらうの事さ
作らやき信さる人し公あつはる
し及罪とす人 *シテ* 是れ *この人の* 汝由作
あまの ちも類ひ人あつはる *の* 時堂

たにらして *抄* 集く名と *の* 文 *の* 文
の 文 *の* 文 *の* 文 *の* 文 *の* 文 *の* 文
の 文 *の* 文 *の* 文 *の* 文 *の* 文 *の* 文
向まふあつ *の* 書 *の* 書 *の* 書 *の* 書 *の* 書 *の* 書
跡 *の* 跡 *の* 跡 *の* 跡 *の* 跡 *の* 跡 *の* 跡
の 跡 *の* 跡 *の* 跡 *の* 跡 *の* 跡 *の* 跡
ゆり *の* ゆり *の* ゆり *の* ゆり *の* ゆり *の* ゆり
ゆり *の* ゆり *の* ゆり *の* ゆり *の* ゆり *の* ゆり
ゆり *の* ゆり *の* ゆり *の* ゆり *の* ゆり *の* ゆり

たつと ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし

ゆつと ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし

夏 ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし

ま ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし

く ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし

あ ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし

あ ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし

あ ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし

あ ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし

あ ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし

あ ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし

あ ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし

あ ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし

あ ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし ^ま せむし

わが梅にや成人の付らひきり
るよ名もなき人跡よの露よあひて
しきせ人し

久き判官殿よさるる者あり

判官殿よさるる人多き中よおはよ

夜何の清夜物もくは倍やなると

十郎持次 ^{ツシム} 意房の判官殿よの死骸

ろろ静よ死にらぬ腹まの端よあて

入ぬよ氣胸よ忠の首ようらやの

なごめよ ^{マコト} 我が女あり

江山にの倍や家うて捨つれまら

まき絶ぬ思り涙の袖 ^ノ つま

あふ ^カ 静よ ^シ 静よ ^シ 静よ ^シ 静よ ^シ

^静 依る静よあふよ

わらわらつゝふくしむる舞のしづみあり

うらやま舞ともよびてはかきこぼせり

愁よ吊ひしやろく 秋まじり舞の

将東よとる勝りも清前よ初あり

^甲舞のいぢやうの行なふ 終ハ精好

^甲水干さ 秋の端ろくはつゝ

^甲乞ひしやろくあつて寶珠を用

まきれつゝつゝ舞の可もあはれぬ衣裏

のんはしとたれしとく舞ろくあ

清前の舞ともよびてはかきこぼせり

清く 秋の端ろくはつゝ

馬あはれとて 秋まじり舞の

時よまよたり 舞の舞 今みり

野へのつゝのなみ ありしやろくあはれぬ

日 大なる白雲のまはりしはくわの山よ
くまの山にまきりかきと頼とほろろ
しうらまのまや祓のつやたす西に
まはれ我らうたらゆきを落ても浪を
かろなるうらまもみりのは頼じ
木陰のたの宮ありたまの奥山の
こころりしまはるるおの月がほろ

うき松ありはさかしのつよきを味ひ
ゆく有る海のまはるはくわの山よ
なを松く遊子遊びはゆるしもいま
身のうへまはるるゆきを物して
いかの借す少卒まはるのおも錦
あしてりしうらまの山は
うらまの山を遊子ゆきわらしと跡を

此本者觀世龙近太夫
以章句寫之并當流之
加秘密悉令改正者也

于時延寶五丁巳年孟夏吉辰

二条通御幸町西江入町

山本源太郎開校



入
身

